

幼児期の音楽活動における保育者の視点 — 鼓隊指導の場合 —

山中 文

音楽科教育

Analysis of Teaching Speech in Music Activities of Early Childhood Education
—The Case of Marching Band—

Aya YAMANAKA

(2003年11月5日受理)

鼓隊活動は、幼児期の音楽表現論者の中で、比較的悪名高い活動である。たとえば、以下などは、その代表的な批判であろう。「(鼓笛バンドでは) 子どもは一人一人の表現というのを完全に無視されてしまい、表現の集団というか、団体的な表現の一つのこまにされてしまい、あとは忍耐力だけが要求されてしまいます。……中略……そういうような鼓笛バンド的な合奏形態というものが蔓延してしまっているために、本当の意味で、子どものときからもっと楽しめるはずの楽器との出会いがかえって無視されてしまっている場合があります」¹⁾

しかし、その一方でマーチングや鼓笛バンド(ここでは総称して「鼓隊」と言い表す)を、英会話教室や水泳指導などと並べて、独自の保育活動としてあげている幼稚園・保育園も数多い。

その指導性が問題にされながら、一方で支持されるのはなぜか。本稿では、保育実践の分析から、鼓隊指導の意義と課題を探る。

はじめに

保育・教育実践においては、保育者・教師がとる行為は子どもの活動を大きく左右する。教師の行為に関して、授業研究分野では、1987年に「教授行為」ということばが登場した。藤岡信勝は、バーバル、ノンバーバルを含めて教師の指導行為を「教授行為」と呼び、「発問、指示、説明から始まって、教材の提示や子どもの討論の組織におよぶ、現実子どもと向き合う場面での教師の子どもに対する働きかけとその組み合わせ」と定義した²⁾。以来、授業研究では、特にバーバルな教

授行為である発問・指示語研究が盛んである。それとともに、教授行為の問題は、学習者レベルの問題だけでなく、教育内容レベルの問題を内包し、また、後述するように授業モデルと関わってくるのが明らかにされてきた。八木正一は、音楽科においても、80年代後半から、指示語に関する研究が見られるようになってきたとし、音楽科において、教授行為研究が、授業における教師の意志決定のあり方や新しい授業モデルの構築まで関わっていることを示唆している³⁾。

保育現場においても、保育者の発話は、保育者が指導したい内容と子どもたちをつなぐ重要な

ルートとなる。特に、鼓隊活動のような集団による音楽活動は、ある作品のパフォーマンスを完成させる、という面で、保育現場の中では強い指導性を持った活動である。子どもに理解不能な発話を連ねて指導を行っても、子どもの表現は変わらない。保育者の発話は、子どもの音楽活動の成否を左右する。その意味で、保育現場における集団による音楽活動は、就学後の音楽科の音楽活動における教授行為と類似しており、その授業モデルと同じような構造を持っていることが予想できる。

前掲の藤岡は、教授行為の分析から、さらに授業には、次のような三つの授業モデルがあることを示している。

- ① 伝達型授業モデル……教師が教育内容を設定し、子どもたちに伝達するシステムをとる。
- ② 触発型授業モデル……教師が教育内容を設定するが、子どもたちを触発し、子どもたち自ら課題を解決する。
- ③ 追求型授業モデル……教育内容も学習方法も、子どもたちが設定運営するシステムをとる⁴⁾。

藤岡は、従来の伝統的な①の授業モデルに対して、②や③の授業モデルの取り組みを展望しているが、音楽科においても、圧倒的に多いのが、①の伝達型授業モデルである。つまり、ある楽曲を元に、教師の楽曲解釈を伝え、子どもたちの演奏をその解釈に近づける、というシステムで行われるものである。この授業モデルをとると、その授業の目標は子どもたちの演奏を教師の解釈に近づけることになるため、教師の発話は、指示や注意が多くなる³⁾。それに比べ、②や③のモデルが子どもたちを触発したり、子どもたちが運営しているようにするために、発問や助言が多くなる。

保育現場の活動を授業モデルにひきつけてとらえるとすれば、鼓隊活動も、おそらく、この①の授業モデルに類するモデルで行われる活動である。それに対して、日常の遊びを中心とした活動は、触発型授業モデルや追求型授業モデルに類似していると考えられる。冒頭にあげたような鼓隊活動に対する批判は、恐らくこのような伝達型授

業モデルは保育現場になじまないとする批判であろうと推察できる。

本研究では、その点から、鼓隊の指導事例がいわゆる伝達型授業モデルとどのように類似しているか、発話分析から検討する。あわせて、そのような伝達型授業モデルをとった場合、保育現場にはなじまないものなのかどうかを検討したい。

発話分析については、発話内容自体の分析も重要であるが、今回は、具体的な発話の量的側面から、特に発話の種類と回数を取りあげた。

1. 鼓隊指導の指導事例と発話分類

1) 指導事例について

本稿で分析した事例は、O市K保育園の5歳児クラスで、担任および補助保育士の指導による鼓隊指導である。2003年9月11、12日にそれぞれ約40分行われた鼓隊活動の発話を採取した。

K保育園では毎年秋の運動会で5歳児がマーチングを披露しており、これは、その練習過程のひとつまでである。なお、K保育園では、鼓隊指導はクラス担任が中心となって日常保育の一環として行っており、園外から鼓隊指導の専門家が来て特別指導を行う、という形はとっていない。運動会における保護者向け発表時も、ベレー帽をかぶる以外特別な衣装はなく、他の園児と同じ服装である。また、使われる楽器群は、太鼓、シンバルなどのリズム楽器であり、キーボードなどのメロディー楽器は使用していない。

時間、対象児等は、以下の通りである。

日 時：第1回 2003年9月11日
9：30～10：20
第2回 同12日
9：30～10：20

場 所：k保育園園庭

指 導 者：5歳児クラス担任
他 補助保育士4名

対 象 児：5歳児25名

担当楽器：大太鼓 男児 2名
小太鼓 男女児 11名
シンバル 女児 4名

ガード 男女児 8名

2) 保育者の発話の分類

事例において収集した発話は、それぞれの発話の内容、発話型から、以下のような分類を行なった。

①発話内容の分類

発話の内容を、以下の6種類から分類した。

・「活動説明」

行う活動内容を説明している発話である。

- Ex. 「昨日できなかったところを忘れて
いる人、思い出して練習してみま
しょう」
「二回目全部通しましょう。一回で
終わらしましょう」

・「活動指導」

活動の具体的場面で指導している発話である。

- Ex. 「Yちゃん向きを換えますよ」
「足をあげて」
「シンバルもっと大きな声で」

・「活動外指導」

活動内容そのものへの指導ではなく、活動の参加を促す発話である。

- Ex. 「Tくんしゃべったらだめ」
「前の子たちはできてるのに。後ろ
の子もちゃんとやろうね。」

・「激励」

活動外指導の一つではあるが、特に意欲を持たせようとしている発話である。

- Ex. 「Tちゃん最後まで頑張っ
てね」
「頑張れば出来るんよ。みんな元
気を出しとかないけん」

・「評価」

評価を行っている発話である。評価内容によってプラス評価とマイナス評価に分けて記載した。

- Ex. 「A2ちゃん上手」(プラス評価)
「昨日とその前、元気よく練習で
きなかったね」(マイナス評価)

・「その他」

上記の分類にあてはまらない発話をその他と

した。

- Ex. 「まだ休憩するからちゃんとすわ
とってね」

②発話型の分類

また、それぞれの発話を、どのような教授行為の型として表れているか、という点から、以下の教授行為上の型に分けた。

「指示」……子どもに思考・行動を指図する発話の型

「発問」……子どもに問いかける発話の型

「指摘+」…子どもの活動について、プラス評価を行っている型

「指摘-」…「指摘」の中で、注意にあたる型

「他」……上記の分類にあてはまらない型

指示とは、指導者がその活動が行えるようになるための情報を伝達し、具体的に促す指図型の発話であり、発問は、子どもたちが情報を得るように思考活動を促す疑問型の発話である。たとえば、「シャボン玉をふくらますように吹きなさい」は指示であり、「○ちゃんの家に行くまでに、いくつ道路を渡るの？」は発問である。指示や発問の指示内容を質的に見ることによって、その指示が活動の目的や子どもの認識にとって適当であったかということがわかる。また、量的にみることによって、その活動における指導者の指導性の強さがわかる。今回は特に後者のデータを取り、前者は稿をあらためることにする。

③発話分類例

以上から、今回は、発話を、発話内容とその型について分類した。下に分類の一例をあげる。

(表0参照)

2. 指導事例における発話数の分析

1) 発話数

この事例における発話総数は、第一日目が91、第二日目97であった。いずれの活動も約40分間であったので、それぞれ1分間に2.27回、2.45回保育士の発話があったことになる。音楽活動が40分間集中して行われることは、このような鼓隊指導や発表会練習など以外ではあまりないので、同じ時間で計測したデータはないが、たとえば、同

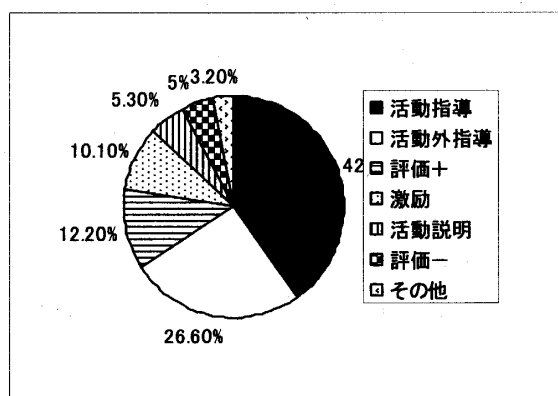
表0 発話分類例

発 話	発話内容	発話型
「バチもったらどうするのかな？」	活動指導	発問
「～ちゃん手をあげて」	活動指導	指示
「～ちゃん足上がってないよ」	活動指導	指摘-
「どうしてちゃんとやらないの？」	活動外指導	発問
「しゃべらんの」	活動外指導	指示
「その女の子、みんなが待ってるでしょう。遊んだらだめ」	活動外指導	指摘-

表1：内容別発話回数

	第1日目	第2日目	全 体	全体割合
活動説明	8	2	10	5.3%
活動指導	32	47	79	42%
活動外指導	22	28	50	26.6%
激励	14	5	19	10.1%
評価+	12	11	23	12.2%
評価-	1	0	1	5%
その他	2	4	6	3.2%
合計	91	97	188	100%

図1：内容別発話割合（全体）



時期（同年9月）に、k県T保育園で記録した音楽実践指導では、4歳児の10分間の音楽活動で保育者は13回（1.3回/分）であり、2歳児の12分間の音楽活動では、11回（0.92回/分）であった。一般的に音楽活動は音楽演奏とともに行われる。演奏中は通常の保育よりも保育者のことばかけは少ないはずである。このことからみれば、今回の鼓隊活動における発話は、日常の保育場面における音楽活動指導の中では多い数であると考えられる。鼓隊活動において1分間に2回強の発話があるということは、それだけ指導性が強いことを窺わせる。

内容別発話数（表・図1参照）において、活動指導（42%）に次いで、活動外指導（26.6%）が多かったことも、それだけこの事例参加に集中させる働きかけをしていたことを窺わせるものである。また、教授行為上の型別の発話数（表・図2参照）では、「指示」と「指摘-」が61.7%を占めており、子どもたちの活動の過半数が指示と注意で促されていることがわかる。

ただ、一方、評価については、-評価が1つ（昨日とその前、元気よく練習できなかった

ね）のみであり、当日の活動自体については+評価だけを行っており、発話数全体の12.2%を占める。このことから、指示や注意で指導性の強い活動ではあるが、評価できる面に着目していくことによって、活動への取り組み意欲を持たせている様が窺える。

2) 発話内容別と型分類

発話は、たとえば、内容としては「活動内容」を指していても、指示型で行われるか、発問型で行われるかなどによって、子どもの受け止め方は異なってくる。その点から、発話内容と発話型についてのクロス集計も行った。

発話内容と型のクロス集計は、第1日目と第2日目を通した発話数で行った。（表3、図3-1、2）

表・図3から、鼓隊演奏活動自体の指導である「活動指導」、また活動への参加を促す「活動外指導」ともに、その発話は、指示、発問、注意（「指摘-」）のいずれかの型をとっていることが分かる。が、その中で、「活動指導」では、「活動指導」に関する発話数79のうち、指示31につい

表 2：型別発話数

	第1日目	第2日目	全体	全体割合
指示	32	32	64	34%
発問	19	20	39	20.7%
指摘+	14	11	25	13.3%
指摘-	23	29	52	27.7%
他	3	5	8	4.3%
合計	91	97	188	100%

図 2：型別発話数割合（全体）

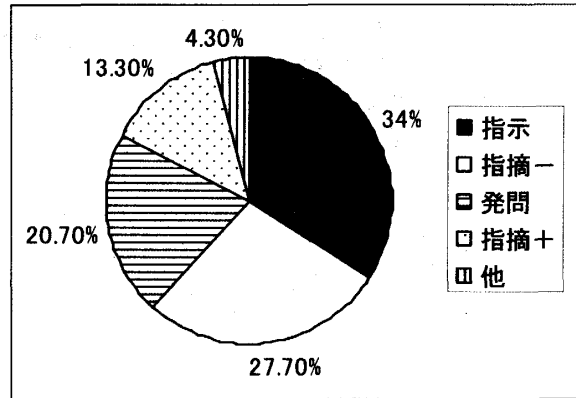


表 3：内容別の発話型（全体）

	指示	発問	指摘+	指摘-	他	計
活動説明	4			3	3	10
活動指導	31	23		25		79
活動外指導	14	13		23		50
激励	14	3	2			19
評価+			23			23
評価-				1		1
その他	1				5	6
合計	64	39	25	52	8	188

図 3-2：発話の各内容における型の出現割合

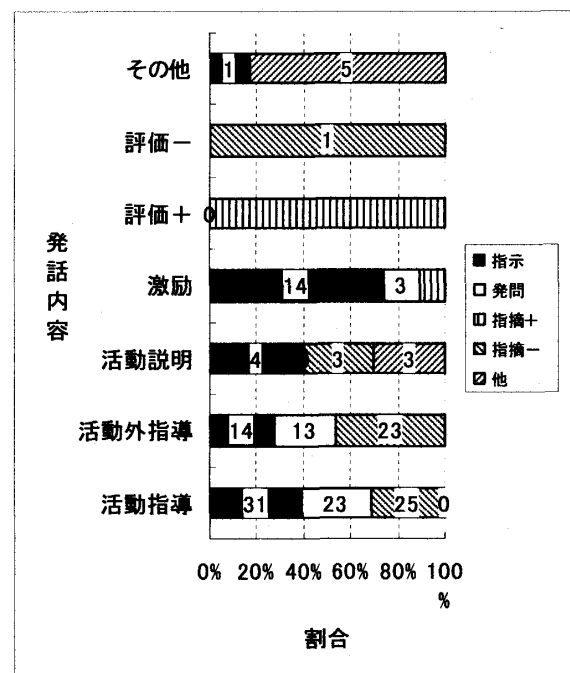
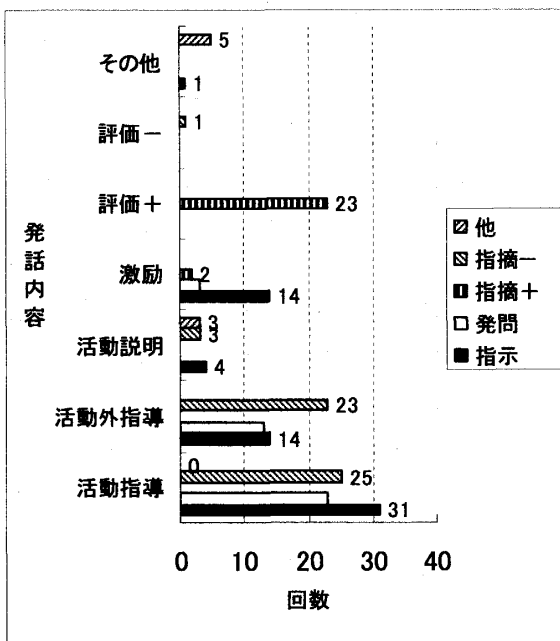


図 3-1：内容別発話の型数



で、発問23と指摘-25が拮抗しており、「活動外指導」ではその発話数50のうち、指摘が23と、46%を占めている。つまり、鼓隊演奏に関しては指示・発問・注意で指導が織りなされ、参加に対する指導としては、指摘による注意が指導の中心に

なっていることがわかる。(図 3-2 参照)

3) 発話内容の時間的变化

上記に加えて、時間別に発話内容の変化をみると、以下の表4・図4、表5・図5のようになる。

1日目と2日目それぞれの活動の流れを、活動内容別に時間で区切り、その区分内の発話内容を調べた。

ガードチームの練習などの時間帯区分では、特に旗の回転やポーズを個別に指示することも多く、両日も直接活動内容を指導する「活動指導」の発話が最も多くなっている。それに対し

表4：第1日目 時間別発話内容

時間別活動	活動説明	活動指導	活動外指導	激励	評価+	評価-	その他	時間別合計
09:30～鼓隊準備・全体奏	2	5	5	1		1		14
09:40～全体演奏再開・通し	1	6	2	4	1			14
09:50～休憩			1				2	3
10:00～太鼓チーム練習	4	7	12	7	4			34
10:10～ガードチーム練習	1	14	2	2	6			25
10:20 活動終了					1			1
発話内容別合計	8	32	22	14	12	1	2	91

て、太鼓チームの練習については、練習するリズム自体がシンプルであるため、活動内容そのものよりも、「しゃべらんの」や「Sくんたたいとらんの見えとる」など、活動に集中することを促す「活動外指導」の発話が多くなっている。

また、全体的には、休憩後の保育士の指導言回数が多くなっていることから、後半に指導の山場があることがわかる。特に、二日目は、休憩をはさんだ全体通しの一回目と二回目で指導言数が18と34と差があり、その様子が顕著である。このように、まず一回軽く通して演奏した後、細かく分けて練習したり、その後全体で通し、全体的な時間の後半にむけて活動の熟達をはかっていくのは、小学校段階以上の合唱や合奏の練習に良く見られる活動であり、この鼓隊活動において、年長児たちがそのような活動内容に挑戦している様が窺える。また、保育士もそのような年長児たちの士気を高めるかのように、後半にプラス評価の指導言を増やしていつている。

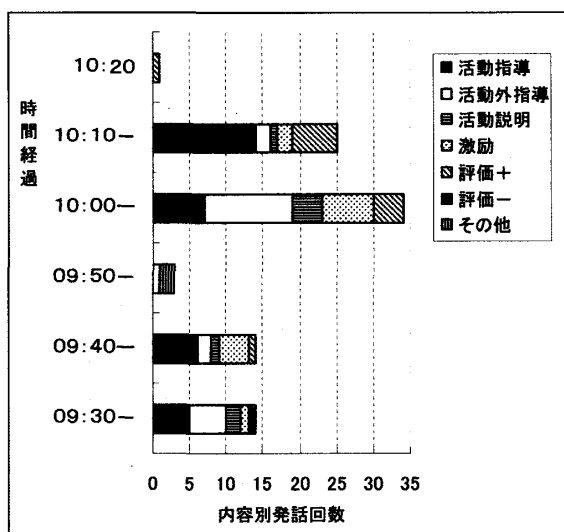
2. 幼児期における鼓隊活動

1) K保育園の指導事例より

このたび採取した事例は、時間別発話内容の推移から、音楽活動として、就学後の演奏活動の指導パターンと類似した活動であることが窺える。さらに発話総数の多さ、「活動内容」に次ぐ「活動外活動」に関する発話数の多さ、また「活動指導」における指示や「活動外指導」における注意（「指摘-」）の多さなどから、音楽の授業に伝統的な伝達型授業モデルに類似していることがわかる。

しかし、この事例では、そのような指示や注意

図4：第1日目 時間別発話回数



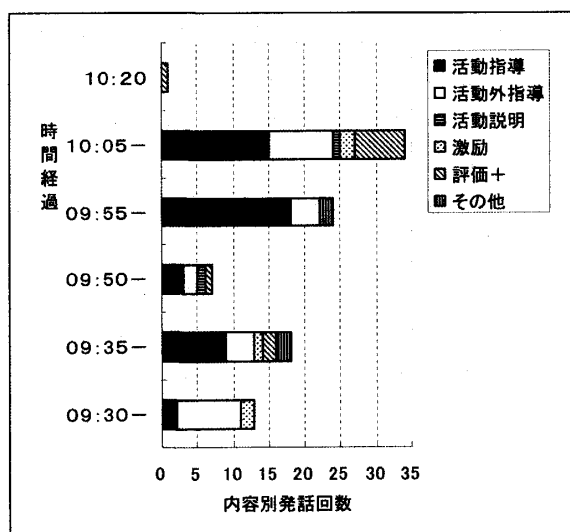
が多い活動でありながら、子どもたちに強制を強くないようにするための手立てをいくつか用いている。ひとつは、一般的な鼓隊指導ではありがたい、園外からの特別指導者による指導は行っていないことである。また、そのための特別な指導時間も設定していない。あくまで、担任による通常保育の一形態として鼓隊練習を行っている。服装も、先に述べたように、加わるのはベレー帽だけである。高額な特別な衣装ではない。また、楽器群も、ピアノ教室など私塾に通うことが前提となる鍵盤楽器は導入おらず、リズム楽器のみである。放送される音楽に合わせてリズムを打つ、ガードを振る、という活動であった。これらのことから、日常保育の中で「リズムを合わせることによって集団のまとまりを体験する」ものとして、鼓隊活動に取り組んでいることがわかる。

この事例の場合、音楽的にいえば、「リズムを合わせる」という活動である。このような内容であれば、他の活動でもいいはずであるが、それが

表 5：第 2 日目 時間別発話内容

時間別活動	活動説明	活動指導	活動外指導	激励	評価+	その他	時間別合計
09:30～ 演奏準備		2	9	2			13
09:35～ 全体演奏通し		9	4	1	2	2	18
09:50～ 休憩	1	3	2		1		7
09:55～ ガード練習		18	4			2	24
10:05～ 全体演奏通し	1	15	9	2	7		34
10:20～ 活動終了					1		1
発話内容別合計	2	47	28	5	11	4	97

図 5：第 2 日目 時間別発話回数



鼓隊でなければならないのはなぜか。ひとつには、それは、音や視覚で、園児にもまともな状況やまとまる視点がわかるからである。視点がわかると、意欲が生まれる。活動の目安を持ちやすいからである。休憩時にも愚痴はきかれず、ガードの回転方法・リズム打ちなどを個々に練習している様が窺えた。また、整列のポーズ、演技、音の迫力は、見ている者に「かっこよさ」と「あこがれ」をもたらす。たとえば、第2日目の演奏時には、年中児が「園内散歩のついで」といった形で、開放廊下から見学していたが、演奏が終わると自然に拍手がおこり、「小太鼓かっこいい」「ぼくはガードをやるぞ」と言い合っている声が採取できた。年中児は年長児の様子から来年への期待を抱き、年長児は、その周囲の視線から、活動に誇りを持つ様子が窺える。

2) 幼児期における鼓隊活動の意義

日常的な子どもの音楽活動の見方には、就学前

後において相違がみられる。共に「豊かな感性を育む」ことをねらいとしておりながら、教科「音楽」の音楽活動においては、音響現象そのものが対象とされているのに対して、幼児期の音楽活動では、その集団における社会的文脈や意味が重要視される。たとえば、幼児期においては「みんなで歌をうたったりゲームをしたりする機会を設け、大勢の友達と遊ぶ楽しさが味わえるようにする」(傍線引用者)⁵⁾という活動や、「ひな祭りに関する歌や絵本などでより関心を高めてお雛さま作りなどの製作活動がより積極的に楽しめるように……」⁶⁾という活動など、仲間づくりやイメージづくりから音楽を活用する活動がとられやすい。音楽活動が他領域の内容や乳幼児の育ちとともに考えられるのは、乳幼児期という時期的・教育方法的な面から当然のことではあるが、それは、一方で、子どもがいかにか音を素材として遊んでいくか、ということよりも、既成の音楽をどう活用するか、ということに主眼がむきがちになることでもある。

鼓隊活動も、現象的には音楽活動であるが、取り入れる園によって、園の広報的役割、集団性の発達に力点が置かれすぎている様子も窺えることがある。幼児期の音楽活動として適切であるかという点については活動に十分な配慮と、音楽的視点から別の保育活動も必要になってこよう。

たとえば、先の事例のような鼓隊活動における音楽的要素は「リズムを合わせる」、つまり「拍間を感じることができ、その上でリズムパターンを打つ」、という点であると考えられるが、それらに関しては、鼓隊活動だけが行えるというものではない。拍間を感じることはできる、というのは、幼児期の重要なリズム行動の発達である。そ

れらは、遊び歌、お手合わせ歌などの多種の遊びで経験できる内容である。そのような遊びの中では、拍があらかじめ規定されるのではなく、拍間やリズムのまとまりを自分たちで規定していきながら活動することができる。また、そのような活動では、当然、指導者の発話よりも子どもたち同士の発話や思考活動が多くなる。前掲の授業モデルに照らしあわせても、②の触発型や③の追求型授業モデルに類似した活動になることが推察できる。このような活動が一方で充分確保されることも念頭に置くべきである⁷⁾。逆に、このような遊びの十分な経験は、鼓隊のリズム打ちに還元されてくるものである。

先にも述べたように、鼓隊活動は、あながち否定する活動でもない。音や視覚でまとまりをもたせやすい、というのは、すぐれた特徴である。そのような特徴が、幼児期後期の音楽活動のリズム行動や、集団としてのまとまりや誇り・あこがれに結びつくように活動される限り、鼓隊活動は、集団のまとまりを感じるひとつの活動にはなり得よう。ただ、「かっこよさ」「あこがれ」は、見学する園児だけでなく、園児の親の心にもひびく。それが高じて見た目の派手さ、忍耐力の強制にエスカレートしていけば、鼓隊活動の意味をなさないことになることはいうまでもない。

*この事例の発話採取は、新見公立短期大学幼児

教育学科23期生・音楽教育領域研究室所属5名と協力して行ったものである。研究の目的が異なるため、収集後のデータ分析等はまったく異なる。

注および引用参考文献

- 1) 阿部明子、竹林実紀子『表現』東京書籍、2000年、p.111
- 2) 藤岡信勝「教材の条件」『岩波講座教育の方法3』1987年、p.188
- 3) 八木正一「音楽の授業研究」『音楽教育学の展望Ⅱ下』音楽之友社、1991年、p.87
- 4) 藤岡信勝「授業構想の3つのモデル」『教育』1987年4月号
- 5) 『奈良佐保女子短期大学附属幼稚園カリキュラム』、2002年、p.83
- 6) 白石昌子「保育カリキュラムにおける音楽的活動の位置づけ」『日本保育学会論文集55』2001年、p.55
- 7) 担任保育士にインタビューしたところ、k保育園では、では、別途、リズム遊びの活動を行っているということであった。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、k保育園から貴重なデータをいただきましたことに、心から感謝申し上げます。